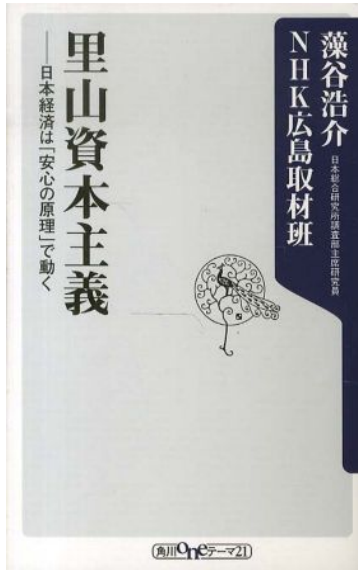


『里山資本主義』

藻谷浩介・NHK広島取材班（著） 梶山寿子（ジャーナリスト）（評）

（角川oneテーマ21・820円）

朝日新聞 13(H25).8.4



◇持続可能なシステム目指す

赤字国債の増発も、原発の再稼働を進めるのも、とにかく今を乗り切るため。刹那（せつな）的な行動に走り重要な問題を先送りするのが、マネー資本主義に染まった人間の病理だと本書は説く。

その対極にあるのが、山林など身近にある資源を活（い）かしてエネルギーや食糧を自給し、地域の経済的な自立と安定を図る「里山資本主義」である。例えば岡山県の製材工場では、通常なら廃棄する木くずによるバイオマス発電で電力を賄い、余剰分は売電。木くずはさらにペレット燃料にも加工されて、地域家庭の暖房などに使われる。

NHK広島の番組がベースのため、紹介される事例は中国地方中心だが、同様の試み

は全国で始まっている。本書の魅力は「里山資本主義」という絶妙なネーミングに尽きよう。取り組みが拡大すれば過疎の町に雇用が生まれ、地域内でお金が回る。持続可能なこのシステムをマネー資本主義の自壊に備える“保険”とせよ、というわけだ。

「先進国・オーストリア」では木造ビルも建築可能な新集成材が開発されるなど、木の潜在能力は侮れない。最先端技術で甦（よみがえ）る古くて新しい経済モデル。里山には年金問題、少子化、無縁社会を解決するヒントも潜む。長所だけを強調しているきらいもあるが、日本の有力な選択肢として熟考したい。